快走

岡本 かの子

中の間で道子は弟の準二の正月着物を縫い終わって、今度は兄の陸郎の分を縫いかけていた。

「それおやじのかい。」

離れから廊下を歩いてきた陸郎は、通りすがりにちらと横目に見てきいた。

「兄さんのよ。これから兄さんも会社以外はなるべく和服ですますのよ。」

道子は顔も上げないで、忙しそうに縫い進みながら言った。

「国策の線にそってというのだね。」

「だから、着物の縫い直しや新調にこの頃は一日中大変よ。」

「はははははは、一人で忙しがってら、だがね、断っておくが、銀ぶらなぞに出かけるとき、俺は和服なんか着ないよ。」

そう言ってさっさと廊下を歩いていく兄の後ろ姿を、道子は顔を上げてじっと見ていたが、ほーっと吐息をついて縫い物を畳の上に置いた。すると急に屈託してきて、大きな背伸びをした。肩が凝って、座り続けた両ももがだるく張った感じだった。道子は立ち上がって廊下を歩きだした。そのまま玄関で下駄を履くと、冬晴れの午後の戸外へ出てみた。

日は既に西に遠のいて、西の空を薄桃色に燃えたたせ、目の前のまばらに立つ住宅は影絵のように黒ずんで見えていた。道子は光を求めて進むように、住宅街を突っ切って空の開けた多摩川脇の草原に出た。一面に燃えた雑草の中に立って、思いきり手を振った。

冬の日はみるみるうちに西に沈んで、桃色の西の外れに、藍色の山脈の峰を浮き上がらせた。秩父の連山だ！　道子はこういう夕景色をゆっくり眺めたのは今春女学校を卒業してから一度もなかったような気がした。慌ただしい、始終追いつめられて、縮こまった生活ばかりしてきたという感じが道子を不満にした。

ほーっと大きな吐息をまたついて、彼女は堤防の方に向かって歩きだした。冷たい風が吹き始めた。彼女はいきおい足に力を入れて草を踏みにじって進んだ。道子が堤防の上に立ったときは、輝いていた西の空は白く濁って、西の川上から川霧と一緒に夕もやが迫ってきた。東の空には満月に近い月が青白い光を刻々に増してきて、幅三尺の堤防の上を真っ白な坦道のように目立たせた。道子は急に総毛立ったので、体をぶるぶる震わせながら堤防の上を歩きだした。途中、振り返っていると住宅街の窓々には小さく電灯がともって、人の影も定かではなかった。ましてその向こうの表通りはただ一列の明かりの線となって、川下の橋に連なっている。

誰も見る人がない……よし……思いきり手足を動かしてやろう……道子は心の中でつぶやいた。膝を高く折り曲げて足踏みをしながら両腕を前後に大きく振った。それから下駄を脱いで駆けだしてみた。女学校在学中ランニングの選手だった当時の意気込みが全身に湧き上がってきた。道子は着物の裾をはしょって堤防の上を駆けた。髪はほどけて肩に振りかかった。ともすれば堤防の上から足を踏み外しはしないかと思うほどまっしぐらに駆けた。もとの下駄を脱いだところへ駆け戻ってくると、さすがに体全体に汗が流れ息が切れた。胸の中では心臓が激しく打ち続けた。その心臓の鼓動と一緒に全身の筋肉がぴくぴくと震えた。――本当にはつら

1【中の間】家の奥にある部屋と玄関などとの間にある部屋。
3【離れ】同じ敷地の中で、母屋とは別に建てた座敷のある建物。
6【国策】ある目的を達成するための国の政策。
8【銀ぶら】東京の銀座通りの商店街をぶらぶら散歩すること。
11【屈託】疲れて飽きること。

1【多摩川】山梨県、東京都、神奈川県を流れ、東京湾に注ぐ川。
4【秩父の連山】群馬県・埼玉県・東京都・神奈川県・長野県・山梨県に広がる山地。
4【女学校】旧制度における女子中学校のこと。
8【いきおい】これまでのなりゆきから、自然に。
10【尺】長さの単位。一尺は約三〇・三センチメートル。
10【坦道】平らな道。
17【はしょる】着物の裾を持ち上げて帯に挟む。たくし上げる。

つと生きている感じがする。女学校にいた頃はこれほど感じなかったのに。毎日窮屈な仕事に押さえつけられて暮らしていると、こんな駆け足ぐらいでもこうまで生きている感じが珍しく感じられるものか。いっそ毎日やったら——

道子は髪を束ねながら急ぎ足で家に帰ってきた。彼女はこの計画を家の者に話さなかった。両親はきっと差し止めるように思われたし、兄弟は親しすぎてからかうぐらいのものであろうから。いやそれよりも彼女は月明の中に疾駆する興奮した気持ちを自分一人で内密に味わいたかったから。

翌日道子はアンダーシャツにパンツをはき、その上に着物を着て隠し、汚れ足袋も新聞紙にくるんで家を出ようとした。

「どこへ行くんです、この忙しいのに。それに夕飯時じゃありませんか。」

母親の声は鋭かった。道子は腰を折られて引き返した。夕食を兄弟と一緒にすましたあとでも、道子は昨晩の駆け足の快感が忘れられなかった。外出する口実はないかとしきりに考えていた。

「ちょっと銭湯に行ってきます。」

道子の思いつきはしごく当然のことのように家の者に聞き流された。道子は急いで石けんと手拭いと湯銭を持って表へ出た。彼女は着物の裾を蹴って一散に堤防へ駆けていった。冷たい風が耳に痛かった。堤防の上で、さっと着物を脱ぐと手拭いで後ろ鉢巻きをした。りりしい女流選手の姿だった。足袋を履くのももどかしげに足踏みの稽古から駆け足のスタートにかかった。爪先立って身をかがめると、冷たいコンクリートの上に手を触れた。オン・ユアー・マーク、ゲットセッ、道子はばね仕掛けのように飛び出した。昨日のごとく青白い月光に照らし出された堤防の上を、はるかに下を多摩川が銀色に光って淙々と音をたてて流れている。

しだいに脚の疲れを覚えて速力を緩めたとき、道子は月の光のためか一種悲壮な気分に打たれた——自分は今はつらつと生きてはいるが、違った世界に生きているという感じがした。人類とは離れた、寂しいがしかも厳粛な世界に生きているという感じだった。

道子は着物を着て小走りに表通りのお湯屋へ来た。湯につかって汗を流すとき、初めてまたもとの人間界に立ち戻った気がした。道子は自分独特の生き方を発見した興奮にわくわくして肌を強くこすった。

家に帰って茶の間に行くと、母親が不審そうな顔をして

「お湯からどこへ回ったの。」ときいた。道子は

「お湯にゆっくり入ってたの。肩の凝りをほごすために。」

そばで新聞を読んでいた兄の陸郎はこれを聞いて「おばあさんのようなことを言う。」と言って笑った。道子は黙って中の間へ去った。

道子はその翌晩からできるだけすばやくランニングをすまし、お湯屋に駆けつけて汗もざっと流しただけで帰ることにした。だが母親は娘の長湯を気にしていた。ある晩、道子がお湯に出かけた直後

「陸郎さん、おまえ、すぐ道子のあとをつけてみてくれない。それからできたら待ってて帰るところもね。」

と母親は頼んだ。陸郎は妹のあとをつけるということが親しすぎるだけに妙に照れくさかった。

5【差し止める】他人が何かをしようとするのを、圧力を加えるなどしてやめさせる。

11【腰を折る】途中で無理に途切れさせる。

16【湯銭】入浴料。

19【オン・ユアー・マーク、ゲットセッ】オン・ユアー・マーク、ゲットセット。陸上競技などで用いられる「位置について、用意。」という意味の言葉。

1【淙々】水が音をたてて滑らかに流れる様子。

10【回る】目的のところにまっすぐ行かないで、寄り道をする。

11【ほごす】ほぐす。

「こんな寒い晩にかい。」彼は別な言葉で言い表しながら、母親のせきたてるのもかまわず、ゆっくりマントを着て帽子をかぶって出ていった。陸郎はなかなか帰ってこなかった。母親はじりじりして待っていた。そのうちに道子が帰ってきてしまった。

「また例のとおり長湯ですね。そんなに丁寧に洗うなら一日おきだってもいいでしょう。」

「でもお湯に行くと足がほてって、よく眠れますもの。」

ともかく、眠れることは事実だったので、道子は真剣になって言えた。母親は

「明日は日曜でお父様も家においでですから、昼間私と一緒に行きなさい。」

と言った。道子はなんて親というものはうるさいものだろうと弱って

「なぜそう私の長湯が気になるの。眠る前に行くほうがいいけれど、それじゃ明日は昼間行きましょう。」

道子は一日ぐらいは我慢しようと諦めた。それがちょうど翌日は雨降りになった。道子は降り続く雨を眺めて――この天気、天祐っていうもんかしら……少なくとも私の悲観を慰めてくれたんだから……そう思うとなんだかおかしくなって独りくすくす笑った。

お昼過ぎに母親と傘をさしてすました顔でお湯に行った。

「そんなに長くお湯につかってるんじゃありませんよ。」

母親があきれて叱ったけれど、道子は自分の長湯を信用させるために顔を真っ赤にしてまで耐えて、長くお湯につかっていた。

やがて流し場に出て洗い桶を持ってくるときは、お湯にのぼせてふらふらしたが、額を冷水で冷やしたり、もじもじしているうちに治った。

「いいかげんに出ませんか。」

1【天祐】天の助け。

母親は道子のそばへ寄ってきて小声でせきたてるので、やっと体を拭いて着物を着たが、家へ帰るとまたおかしくなって奥座敷へ行って独りくすくす笑った。

「道子はこの頃変ですよ。毎晩お湯に行きたがって、行ったが最後一時間半もかかるんですからね。あんまり変ですから今日は私昼間連れていってみました。」

母親は茶の間で日記を書きこんでいた道子の父親に相談しかけた。

「そしたら。」

父親も不審そうな顔を上げてきいた。

「ずいぶん長くいたつもりでしたが四十分しかかかりませんもの。」

「そりゃお湯の他にどこかへ回るんじゃないかい。」

「ですからゆうべは陸郎にあとをつけさせたんですよ。そしたらお湯に入ったというんですがねえ、その陸郎があてになりませんのよ。様子を見に行ったついでに、友達の家へ寄って十二時近くまで遊んでくるのですから。」

「ふーん。」

父親はじっと考えこんでしまった。

雨のために響きの悪い玄関のベルがちりと鳴ってやむと、受信箱の中に手紙が落とされた音がした。母親はさっそく立っていって手紙を持ってきたが

「道子宛ての手紙だけですよ。お友達からですがねえ、この頃の道子の様子では手紙まで気になります。これをひとつ中を調べてみましょうか。」

「そうだね、上手に開けられたらね。」

父親も賛成の顔つきだった。母親は長火鉢にかかった鉄瓶の湯気の上に封じ目をかざした。

15【受信箱】配達された郵便物を受け取る箱。郵便受け。

20【長火鉢】木製で、横に長い箱型の火鉢。引き出しがある。

20【鉄瓶】鉄製の湯沸かし器具。

「すっかりぬれてしまいましたけれど、どうやら開きました。」
母親は四つに折った書簡箋をそっと抜き出して広げた。
「声を出して読みなさい。」
父親は表情を緊張さした。
勇ましいお便り、学生時代に帰った思いがしました。毎晩パンツ姿もりりしく月光を浴びて多摩川の堤防の上を疾駆するあなたを考えただけでも胸が躍ります。一度出かけてみたいと思います。それに引きかえこの頃の私はどうでしょう。風邪ばかりひいて、とてもそんな元気が出ません……
「へえ、そりゃ本当かい。」
父親はいつもの慎重な態度も忘れて、頓狂な声を出してしまった。
「まあ、あの娘が、なんていう乱暴なことをしてるんでしょう。呼び寄せて叱ってやりましょうか。」
母親は手紙を持ったまま少し厳しい目つきで立ち上がりかけた。
「まあ待ちなさい。あれとしてはこの寒い冬の晩に、人の目のないところでランニングをするなんて、よくよく屈託したからなんだろう。俺だって毎日遅くまで会社の年末整理に忙殺されてると、何か突飛なことがしたくなるからね。それより俺は、娘の友達がいってるように、自分の娘が月光の中で走るところを見たくなったよ……俺の分身がね、そんなところで走ってるのをね。」
「まあ、あんたまで変に好奇心をもってしまって。でも万一のことでもあったらどうします。」
「そこだよ、場合によったら弟の準二を連れていかせたら。」

2【書簡箋】便箋。
10【頓狂】問が抜けて調子の狂った様子。

「そりゃ準二がかわいそうですわ。」
「ともかく、明日月夜だったら道子の様子を見に行く。」
「あきれたかたね、そいじゃ私も一緒に行きますわ。」
「おまえもか。」
二人は真剣な顔をつき合わせて言い合っていたが、急におかしくなって、はははははと笑いだしてしまった。二人は明日の月夜が待たれた。

道子には友達からの手紙は手渡されなかったし、両親の相談なぞ知るよしもなかった。ただいつも晩飯前に帰らない父親が今日は早めに帰ってきて自分らの食卓に加わったのが気になった。今晩お湯に行きたいなぞと言えば母親が一緒に行くと言うかもしれぬ。弱った。今日は午前中に雨が上がって、月もやがて出るであろう。この好夜、一晩休んで肉体が待ちかねたようにうずいているのに。だんだん遅くなってくると道子はいらいらしてきてとうとう母親に言った。
「お湯へやってください。頭が痛いんですから。」
母親はべつに気にもとめないふりで答えた。
「いいとも、ゆっくり行ってらっしゃい。」
道子はわれ知らず顔を綻ばした。こんなことってあるかしらん――道子は夢のような気がした。夢なら覚めないうちにと手早く身支度をし終わって表へ出た。寒風の中を一散に堤防目がけて走った。――今夜は二日分、往復四回駆けてやる――
道子は堤防の上に駆け上がって着物を脱いだ。青白い月の光が彼女の白いアンダーシャツを銀色に光らせ、腰から下は黒のパンツに切れて宙に浮かんだ空想の胸像のごとく見えた。彼女はま

16【われ知らず】無意識のうちに。

ず腕を自由に振り動かし、足を踏んで体慣らしをすました。それからスタートの準備もせずに、いきなり弾丸のように川上へ向かって疾走した。やがてはるかの向こうでターンしてまたもとのところへ駆け戻ってきた。そこで狭い堤防上でまたくるりとターンすると再び川上へ向かって駆けていった。

このときあとから追っかけてきた父親は草原の中に立ってはるかに堤防の上を白い塊が飛ぶのを望んだ。

「あれだ、あれだ。」

父親は指さしながら後ろを振り返って、ずっと後れて駆けてくる妻をもどかしがった。妻は、はあはあ言いながら

「あなたったら、まるで青年のように走るんですもの、追いつけやしませんわ。」

妻のこの言葉に夫は得意になり

「それにしてもおまえの遅いことったら。」

妻は息をついで

「これでも一生懸命だもんで、家からここまで一度も休まずに駆けてきたんですからね。」

「俺たちは案外まだ若いんだね。」

「おほほほほほほほほほほ。」

「あははははははははは。」

二人は月光の下を寒風を切って走ったことが近来にない喜びだった。二人は娘のことも忘れて、声をたてて笑い合った。

〈出典『岡本かの子全集　第5巻』（筑摩書房、一九九三年）〉

【著者】岡本 かの子（おかもと かのこ）
一八八九（明治二二）年―一九三九（昭和一四）年
小説家・歌人。東京都の生まれ。
【著書】『母子叙情』『老妓抄』『生々流転』など

6 【望む】遠くから見る。